母とのたたかい

—時代をこえる女の生き方—

生方美智子

やさしいお母さんのぬくもりが欲しい。
母から娘へ女の生き方は、
鎖のようにつながってゆくのでしょうか……。

リヨン社刊

母とのたたかい　Printed in Japan

著　者　生方美智子

発　行　株式会社　リヨン社

電話東京（946）0067
振替東京0－54728

発　売　株式会社 二見書房

東京都文京区音羽1の21の11
電話東京（942）2311

印刷　堀内印刷

製本　ナショナル製本

© Michiko Ubukata
無断転載を禁ず

落丁・乱丁がありました場合は，おとりかえします。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-576-85034-2

母とのたたかい／目次

プロローグ——親不孝もの

第一章　やさしいお母さまがいい　10
——「親は親です。しつけとは痛いものです」

第二章　毛糸のはらまき　82
——手さぐりでつかんだ解放感

第三章　着のみ着のまま　114
——恋をして家をでる

第四章　台所の虫　150
——和解のあとでめぐってきた幸せ

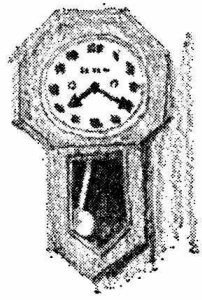
第五章　明日からはひとり　170
——夫の死……そして

第六章　一通の茶封筒　200
——父のねがい
第七章　やはり、母と娘　216
——長い長いたたかいのあとで
あとがき　234

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本文イラスト／山岡勝司

プロローグ——親不孝もの



親不孝もの

「貴女が親不孝の美智子さんですね」

ある日、わが家へ取材に見えた朝日新聞、『新人国記』群馬県担当のY記者の、のっけからの挨拶でした。

意表を突かれた私は、Y記者をじっと見つめたまま言葉が出ません。

はじめて会った人に、自分の歩いた道を「親不孝」といわれたおどろきはただごとではありませんでした。ショックで、胸の鼓動が大きくきこえてくるのがわかりました。

母の関係で多くの編集者が出入りしているのに、私の耳へは一度もはいらなかった言葉でした。

私はすっかり動揺していましたが、表面はニコニコしながら問いただしました。

「Yさん、なぜ、あなたは私を親不孝とおっしゃるのですか？」

すると、Y記者もやわらかい語調で、

「ご存じないのですか？　たつゑ先生の『雪の日も生きる』に書いてありますよ。それから歌集（昭和26年〜29年）の中にもありますよ。ですがね、生方たつゑの短歌人生にとって、あなたは大切な存在です。あなたが親不孝だったから、生方たつゑは歌を昇華させていくことができたのです。それにあなたのご主人が亡くなられたころから、肉親の痛みがわかるようになったようです。そしてお父様が亡くなってはじめて人間らしく、さびしいと素直にいえるようになったようですよ」

私はあまり母の歌を読まず、母もまた、自分の歌集や本を私に見せようともせず、また私も見たいとも思わずにいままですごしていた自分に初めて気がつきました。

娘の非情さを歌と文章で表現しつづけると、私は、Y記者がいったような娘に思えるのでしょう。

「生方たつゑの娘は親不孝だ」

と母の周囲の人たちや読者の人に長いこと思われてきていたわけです。

親不孝の娘をもってなんと気の毒な歌人だ、とも……

Y記者はつづけました。

「でも、あなたの親不孝が、実は親孝行になっているのです」

母の取材に現われた、歯切れのよいY記者にめぐりあったおかげで、

「何が親孝行で、何が親不孝なのだろうか。誰だって親に反抗することは一度や二度あるのに、親の意に反したら、一生親不孝と呼ばれなければならないのだろうか？それに、生まれた時から親孝行を絵にかいたような人が本当にあるのだろうか。それは世間体のためにきれいごとばかりいっているのではないだろうか、生きているかぎり、子どもが成長してくる過程でかならず親と子の葛藤はあるはず、それでも、肉親の思い出は美しいもののみがのこされるというから……。もしかして、親不孝者の烙印をおされた私が異端者なのかもしれない」

と、私は自分と母のことを自分なりに考えてみるきっかけができました。

私は、大切なものは大事にしながら生きてきたつもりです。

でも、たしかに、私たち母と娘は激しいいさかいをくり返しながら、なんとも長い年月がたちました。

お互いに妥協もせず、自分の道を走りました。

それは母も娘も未熟であるがための、戦いだったかもしれません。

この激しい戦いは、わがままな母娘二人への、先祖からの戒めであったのかもしれません。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章
やさしいお母さまがいい
――「親は親です。しつけとは痛いものです」

おいたち

しつけ

過保護

下手な絵
トンネル
奥利根の自然
谷川一の倉沢
伊勢とのかかわり
おはるさんとおもとさんと高橋君

おいたち

私が生まれたのは群馬県の沼田(ぬまた)市。

昭和三年五月七日、三百九十年つづいた生方(うぶかた)家・二十七代目のひとり娘として生まれました。

私の生家の旧宅、生方家は東日本では最も古い商家のひとつとして、昭和四十六年に国の重要文化財となり、現在、沼田市の公園に移築されています。

沼田市は城下町で、生方家は苗字帯刀を許された家として代々生方弥右衛門を襲名してきましたが、私の父がモダンな考えの人でしたので、父の代で襲名をやめました。不思議なもので襲名をやめることは家業(薬種業)をやめることにつながり、そして建物と共に家がつづくことも終わりました(もし私が沼田にのこり家をついでいたら現在のようなのこり方はしなかったかもしれません)。

重要文化財として移築された今、私の生まれた家は私が生活してきた頃とは違った、

建築された当時の原型にもどされていますので、私の育った時の小さな思い出の手帳にかかれたものは、すべて消されてしまっております。

でも沼田の土地に生きた先人の家は、重要文化財として残されることになったのですから「幸せ」というべきでしょう。

町の中で大火が何度もあったのになぜそんなに長い間、ただ一軒残ったのかといいますと、我が家のお稲荷さんが火伏せの神であったそうで、家のすぐ隣まで焼けてきても、また火がもとへ戻っていったといわれます。

「ふじや（地元の人々はうちを「ふじや」と呼んでいました）は火伏せの神がついているそうだ」

「火事になったら大事なものはふじやの蔵へしまえば燃えないから」

ともいわれるほど火事には強い家のようでした。

なるほど、白い蔵の前の扉は何重にも厚く、どんな火でも近づけないほど、頑丈なものでした。

私はわかりませんが、家相も、東京からきた家相をみる人が通るとかならず驚いて立ちどまるといわれたほどよい家相をしていたそうですし、よい月、日、時までを先人がしっかり選んで建てたと聞きました。重要文化財として解体する時も、あまりの

壁の厚さに文化財研究の方々がおどろかれたそうです。そして天井にはびっしりと全国の神社やお寺のお札がはられていたそうです。信心深い先祖であったようです。

燃えないから残ったのか、燃えないほどの配慮がされていたのか、よい家相だったのか、いずれにしても家が残るということは、細々ながら各代の人々がなみなみならぬ努力をつづけたからでしょう。

私が、家業を継がなかったのに、生方家旧家が残されているということはありがたいことだと、これも先祖が残してくれたものと感謝しています。

生方家は、真田の御用達として、真田居城の頃から薬種を扱っていた関係から、御典医との縁組が多くされていたようでした。その生方家の誰もが家を継ぎたくなくて若い頃は脱出するのですが、代々、先祖の霊につかれたようにかならず家にひきもどされました。祖父も東京の医学校からもどされ、父もアメリカからもどされて家を継ぐことになりました。

私がもどされなかったのは先祖からの家を継がせるのに適当な娘でないと思われてしまったのかわかりません。東京の女子大に入学してから現在までずっと東京ぐらしになりました。

古い家というのは「旧家」という重さをしっかりと鎖のように次の代につなぎとめ、

また次の代へと受け継がせる力と、受け継ぐというひたむきな力を代々伝える不思議な魔力をもっているようです。

それでも私が家業を継がなかったというのは、父や母が私を育てた時に問題がありました。

この古い家を継ぐ責任の苦しみから、自分たちの夢の世界へのがれたいという思いが父と母にあったらしく、どうしても家を継がせようという努力も、家を継ぐ魅力も私に与えなかったのです。

「こんな山国にいることはない」

「こんな仕事はやめてしまえばよい」

こんな会話をききながら育ち、家業を継ぐこととは異なった自分の世界を見つけて歩き出している父母の姿を、小さな目は見ていました。

あるとき、次男の高志がこういうのです。

「家を守りつぐということは大変なことなんだね。必死で力を合わせて一代を無事にとおし、そして次の代へわたす。それが不適格な人もいるだろうし、優秀な後継者もいる。でも、一代の人がどんなに優れていても長い伝統というのはそれよりはるかにすばらしいことだと思うね。でも、どうして、ママは捨てたの？　築くことは大変な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com